

## 令和2(2020)年「正覚寺報」6月号

## お知らせ

五月半ばに新型コロナウイルスの緊急事態宣言が全39県で解除され、ホット一息つくことが出来るようになりました。それでも、県境を越えての移動は要注意であり油断がなりません。

五月度は、年に一度の折角の「降誕会(ごうたんえ)」が営めず、楽しみにして戴いてきたお子達の皆様には申し訳ないことになりました。

どうか来年の降誕会を楽しみにお待ち下さい。来年は5月15日(土)の予定です。

記

仏教壮年会お聴聞の会(6月7日(日)20時)

仏教婦人会例会(6月16日(火)19時半)

えた言葉ではなく、お浄土から発せられた如来様のお喚(よ)び声だったのです。

「南無」とは、「帰命」、「帰せよの命」との如来様の仰せになってお浄土から届いて下さったお喚び声ですから、称えつつ聞かせて戴くのが衆生(私)に求められる姿であります。

## 聞かせて戴く私としてお育てに与る

新型コロナ対策で広大会が中止の旨お伝えした勉強会仲間で他院元総代のFさんから、次のような御返事が帰って参りました。

「りびんぐらいぶず」ありがとうございます。読ませて戴きますと、すべてが理解できるわけではありませんが、ふと気付くこともあります。

1月第3号「二種法身」は、これまで気にも留めずに済ませてきた法性法身(ほっしょうほっしん)と方便法身のお話でした。理解したところは、「本来認識できない仏様を認識できるようにする。認識できるようにして初めて仏様の意味がある」ということです。

「見えないものをみえるようにすることによって初めて見えないものへの認識が生じ、見えないものの持つ意味が私たちにとって身近な意味として成立する。

相手に伝わるように相手の理解出来る言葉で伝えることができ初めて考えたことが意味を持つのではないか」とかつてある方から教わった言葉を思い出しました。

その時、当院の同行方針(実践目標)の1.「お聴聞を通じて和やかなコミュニティを実現します。(ア)「お聴聞はメディテーション」をお聴聞の会で実践します。」が思い起され、私自身がお育てに与る思いでありました。合掌。

## どのようにすれば信心を獲得できるか

善導(ぜんどう)大師は「行につきて信を立てる」と仰せになりました(就<sup>じゅう</sup>行立信<sup>りつしん</sup>積)。

歎異鈔第2条の「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと(法然聖人)の仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり(Ref 註釈版p832)は世の中に最も良く知られた実例です。

お念仏は如来様が本願成就してお手許で仕上げられた如来様の行ですから、これを賜って「仰せの通りにお念仏しましょう」とご案内されたとき、無意識にも「さようか」と頭が垂れることが「信心」そのものだったのです。

これが、お念仏という「行」について、疑いなくお浄土へ参らして戴きますと思ひ取る「信心」であります(当院の就<sup>じゅう</sup>行立信<sup>りつしん</sup>積)。

称えれば、直ちに聞こえて下さるものこそは、南無阿弥陀佛です。これは人間のこしら